



東京島しょ郷友連合会だより

20号

【発行 者】
東京島嶼郷友連合会
【発行・編集責任者】
秋 廣 道 郎
【制作・印刷】
オフィスYK

《ごあいさつ》

島嶼郷友連合会会長

秋 廣 道 郎



明けましておめでとうございます。
ございます。

今年は、当連合会が各島の郷友会と連携して、東京島嶼出身者相互の親睦を図り、東京島嶼の発展に寄与し、島嶼との交流をすることを目的として発足し、六〇年になる記念となる年です。

東京島嶼の皆様にとっても、私達、郷友連合会に参加されている皆様にとっても、飛躍の年になりますよう心から祈念しております。

郷友連合会は、少子高齢化が進む困難の中で、各島で生活し、頑張っておられる島民の方々に敬意を表し、寄り添う気持ちを持つことが大切であり、「足を使い、汗をかい」て島々との交流を推進してきました。

昨年は、連合会は一〇

月には、第二回の大島出身の人間国宝の竹本葵太夫さんの歌舞伎見学（五〇名）、竹本葵太夫さんを囲んだ懇親会（四〇名）、十二月には、大島ゴルフリゾートでの第二回郷友連合会ゴルフ会（二十四名）を行う等貴重な企画を行ってきました。

又、八丈島郷友会では、毎年恒例の新年総会、秋には八丈高校卒業生激励会、利島郷友会では、恒例の昭和公園での懇親会など行っております。

今年五月十一日に市谷のアルカディアで行います郷友連合会総会は、六〇周年を記念する総会として、懇親会も併せ、記憶に残る集いとしたいものです。

今年も、東京島嶼出身者相互の親睦、東京島嶼の発展への寄与及び島嶼との交流を更に発展させて参ります。皆様のご協力とご支援をお願いいたします。

大島郷友会 白井 勝美
利島郷友会 梅田 勉
新島郷友会 大沼 傳次郎
神津島郷友会 清水 邦洋
三宅島郷友会 高松 宏惟
八丈島郷友会 菊池 順

島嶼郷友連合会 理事長

河野 秀夫

新年あけましておめでとうございます。

本年も郷友会活動にご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

先人が創設した当会も本年で六十年を迎えます。私も叔父と参加して早四十年経ちましたので、当会の今迄とこれからを年頭所感とします。

思い出深いのは、やはり三原山、三宅島の噴火や土砂災害による募金活動です。自然災害に各島が丸となって島のために駅頭に立った姿は未だに忘れられません。また、島巡り旅行や大島屋（自由が丘）での総会は、各島の大先輩から聴く故郷の想いや酒を嗜む所作は威厳があり、東京で生きる自負心を学びました。

昭和、平成、令和と時代は変わっても、島嶼が災害等に直面したら、個人の力は小さくても在京者がまとまれば役立てるのではないかという思いは一つです。また年に一度、生まれた島の人達はもとより他島の皆さんと顔を合わせて話せる場合は

心が和む時間です。

このような島と人をつなぐ活動は継続しつつ、六十年を節目としてこれからにふさわしい活動も行っていきたいと思えます。その一つが、島の生徒や若者の上京を応援する活動（高校野球やサッカー、成人の集い等）です。子供達の上京の不安や緊張を郷友会の声援で安心と心強さに変えられると思うのです。二つ目が、「ふるさと納税」や「積極的に島へ帰る」という応援です。どちらも無理せずできる範囲を基本として、一人ひとりの行動は小さくても継続すれば島嶼支援が大きなムーブメントになり得ます。

今年「巳年」です。

「巳」は「実を結ぶ」年ともいわれます。六十年を機に、老若男女特に若い人も参加しやすい活動を展開して島と在京者を結んでいきたいと思えます。



印鑑・ゴム印・名刺作成・チラシ・はがき印刷・封筒印刷・名入れタオル カレンダー
各種伝票類・コピーサービス・パウチ加工

TEL 04-2946-7571

FAX 04-2946-7581

〒359-0006 埼玉県所沢市所沢新町2460-2

《山口 勝子》

オフィスYK

令和六年度

理事長 河野 秀夫

郷友連合会の活動計画と会議報告

当連合会の活動も今年六十年を迎えます。今後とも各島で協力して活動してまいりますのでよろしくお願いいたします。

■第五九回定期総会報告

昨年五月開催の総会は、神津島の前田村長、小笠原の渋谷村長はじめ、人間国宝の竹本葵太夫氏（柳瀬信吾さん）、七島信用組合の鈴木理事長、東京七島新聞社の福田代表、小笠原村商工会



の打込会長等のご来賓をお招きして、総勢六十七名で盛大に開催しました。

令和六年度の事業計画は、前年に続き「ふるさとに思いを寄せる」活動の具体化として①郷友連合会六十周年の記念事業を準備する。②足を使い汗をかく島の島々との交流の推進（野球、サッカー、吹奏楽など各島の高校・中学の見学と応援、歌舞伎鑑賞、ゴルフ交流会等）③各島郷友会の充実支援等の八つを基本方針として各島の自治体、法人、団体と連携を図ることをご承認頂きました。

懇親会では、竹本葵太夫氏の紫綬褒章の受賞を披露するとともに、各会長からご寄贈頂いた恒例の各島自慢の焼酎やワイン等で会話が弾み、特に各テーブルの出席者紹介や近況報告等は会を和やかな雰囲気包んでくれて、総会も懇親会も賑や

かにお開きとなりました。

■各事業報告

○理事会（七月二十一日）記念事業の検討

計画事業の具体化等

（島嶼会館内食堂で出会った各島中学のサッカー代表チームに大会出場の激励として各会長から寄付金を贈呈しました。）

○歌舞伎鑑賞会（十月十二日）※投稿記事参照

○ゴルフ交流会（大島）（十二月十四・十五日）

六十回定期総会の案内各島出身者が一堂に会する当会の定期総会は今年六十周年を迎えます。

記念総会となりますので、島にゆかりのある作家の安部龍太郎氏をお招きして講演を予定しています。懇親を深める貴重な交流の場となっていますので、お気軽にご参加ください。

令和七年五月十一日（日）午後十二時
アルカディア市ヶ谷

伊豆大島が大好きな観光客 二人組『move! izuoshima』

move! izuoshima 高尾・山本

皆様、はじめまして。

『move! izuoshima（ムーブ・イズオオシマ）』の高尾・山本です。

私たちは島出身でも島の関係者でもない「いち観光客」ですが、二〇二〇年五月から伊豆大島の魅力を SNS で発信する活動をしています。

活動を始めたきっかけは、二〇一九年。初めて二人で大島へ行った際、島民の方の案内で島を巡りすっかり大島の虜になったのですが、当時 SNS で「伊豆大島」と調べると、どんよりした風景写真が多く、私たちが目にした魅力的な大島とかけ離れていたのです。さらに観光情報が分

かりにくいと感じ、「それなら自分たちで発信してみよう」と SNS を始めました。

SNS には、私たちが「本当にいいと思った物、事、場所」のみを付度なしに投稿しています。

大島は登山や温泉、釣り、ダイビング、サイクリングだけじゃない、「こんなに素敵で楽しい島なんだよ!」という私たちならではの視点で、魅力が最大限伝わる写真と共に紹介することを心掛けています。活動が実を結び、現在 SNS（Instagram）のフォロワー数は五、四六〇人、伊豆大島関係のアカウントで No.1 です。

SNS 以外でも精力的に活動を行っており、例えば、町役場で行われた島民向けの講演会に登壇、大島町立さくら小学校の課外授業に講師として参加、元町にある喫茶店『momomono』でイベントを開



催。二〇二四年十一月には、渋谷の人気店『もうやんカレー』で一ヶ月間「伊豆大島まつり」を実施し、大島の認知度を上げる活動を行いました。他にも、島の事業者様からの相談に乗ったり、SNS 上で一人ひとりの希望に沿った旅相談などを行ったと思っています。

何度行っても、新しい発見や出会いがある大島。今では知り合いも増え、大島に着くと「ただいま」と言いたくなる、私たちにとって第二の故郷です。

二人でも多くの人に私たちの発信が届き、大島という存在を知ってもらいたい! そんな想いを胸に、これからも大好きな大島を広める活動をしていきたいと思っています。



いさぎ網漁

大島会理事 川島 晴男

私が生まれ育った伊豆大島では、六月初旬から真夏にかけて本格的ないさぎ網漁が行われる。母方の実家が網元でもあり、私は中学生の頃から否応なしに駆り出され、よく漁へ出た。

早朝四時、港は我先にと漁場へ向かう漁船で大賑わいだ。幾つかの入り江にある好漁場の中で、潮の流れや空模様など過去の経験から当日の漁場を決め、袋網と称する定置網を張る。そこへ五〇隻余が連なる漁船軍団が沖合い大きく回りこみ魚群を追い込んでいく壮大な追い込み網漁だ。

おのおのの漁船はもやい網で等間隔に繋ぎ、海中にも同様に繋ぐ。海中の綱には仕掛けがあり、ヘラと云う長五角形をした五〇センチ程の白色板を無数にくくり付ける。このヘラが、潮の流れとあいまって、まるで生き物のように海中で踊るのである。そこへカーレンと呼ぶ鉄製の輪がついたくさびを、船首から海底鋭く打ち込む。この重い手

網のカーレンを繰り返し打ち込むのが若い衆の役割だ。さらに潜水夫を配し、彼らはもりを持ち手足を大きく広げながら、漁船と共に海底から魚群を追っていく。

ヘラが踊り、カーレンの「カシャーン」と云う強い響きと、潜水夫のパフォーマンスに魚達は恐れおののき逃げるのである。その逃げる先が袋網となる按配だ。袋網へ追い込み、タイミングよく入口を塞いだところでようやく昼の一服、握り飯をかぶりつく。

午後はいよいよ袋網の追い込みだ。慌てず徐々に追い込むのだ。急ぐと魚群が暴走し網を目掛けて突進する。そうなると手がつけられず網はいとも簡単に破られてしまう。追い込みも最終段階になると、突如海面がどす黒く変わる。暗褐色のいさきが大量に入った証だ。瞬間、全長一メートルを有に超えるひらまさやかんばちが、船にも飛び込む勢いで、無数に空高く飛び跳ね上がる。大

漁だ！ベテラン漁師が叫ぶ。まさに、血湧き肉躍る、感極まる瞬間だ。回遊魚であるしまあじなどが入っているものならまさに一攫千金である。

船への荷揚げもたいそうな重労働だが苦にもならない。ちなみに、ひらまさなどの大型魚を扱うには尾を持つても強い筋力に振り切られてダメだ。

赤ん坊を抱くような要領でやさしく抱擁すると、不思議なほどおとなしい。いよいよ大勢が待つ港へ凱旋だ。船長は大漁旗を掲げる。港へ近づくとつれ大歓声が沸きあがる。こちらは、まるで英雄気取りだ。

この組織だった漁を成功させる秘訣は、老練な漁師の能力を十分に引き出しながら全体を統率する網元のリーダーシップと、分け前の配分仕組みにあると思う。個性が強いプロの漁師達を適切に活用し目的を達成させる様は、まるでタクトを振り、快いハーモニーを醸し出すオーケストラの指揮者だ。

例えば船には六人工、船長は三人工、機関長は1.5人工と云うような具合で決まっている。ちなみに高校生だった私は、0.7人工。それでも大漁の時は、当時のお金で六、七万円はもらった。また、いわゆるボウズの時は、網元が最低保証金を負担する仕組みにもなっている。

生涯を漁で過ごした今は亡き祖父からは、「敵はつくるな、どんなに憎くても苦しい時、だれに助けてもらうか分からない」「二〇〇日漁があれば一〇〇日出よ、九十九日不漁でもたつた一日で豊漁に笑う時がある」と教えられた。今にして思えば、島で生き、漁師として生き抜く哲学であったのであろう。

近年は、環境の変化や人手不足などでさほど大がかりな漁は行われていないようだが、伊豆大島のいさぎ網漁はこれからの季節がいよいよ本番だ。



年末年始のくらし変化

三宅島郷友会 会長 高松 宏惟

あけましたおめでとうございます。近年島も地球の気候変化が顕著に影響を受けて夏秋の気温上昇が身体を襲います。農業も気候変化に苦難している。漁業は海水温の上昇が磯焼けや魚種変化で漁業の苦難が進んでいる。

生き物は変化について行かなければ絶滅すると言われる。この地球規模の変化の原因の多くは人間の生活が大きいと言われています。

さて、島の暮らしも時代とともに変化していきます。年末年始の生活も昭和の時代を思い返すと変化が凄いですね。十二月になるとそこらじゅうに畳等を並べて一家総出で大掃除を行います。餅つきは近所みんなで力を合わせて早朝から一日かけて行い。お節料理を作り。男は村中を飲み歩き、呑んだくれがそこらじゅうを歩き回っていました。女はお客の接待で大忙し。一月は毎週土日は行事が続く二月の初午でようやく終わりを告げます。忙しく大変でしたが楽しいです。

今は大掃除の習慣はなくなり、餅はお店で一年中買えます。お節料理は通販で届きます。呑んだくれは嫌われまます。今は辛く苦しく大変な時代に思えますが、今は今でいい時代です。楽しい事がいっぱいあります。伝統行事も暮らしとともに変化していき、生活も時代の変化とともに変化します。この変化を楽しむ心と身体を作る事が大切だと思います。

スマートウォッチ（ウェアラブル端末）は血圧、脈拍、体温、心電図も測り転倒するとSOSを発信してくれます。高齢社会では便利なものなのです。そして携帯電話の位置情報は家族共有。年末年始は携帯電話を家に忘れてお出かけが最高ですね。私は自然豊かで優しい人の住む島で生活する事が一番幸せだと思います。今年も皆様のご健康とご健勝をお祈りいたします。

八丈島郷友会の活動

副会長 駒木 正雄

新年明けましておめでとうございます。

八丈島郷友会は、昨年度も八丈島そして島嶼との親睦交流をはかって参りました。

島嶼関係では、愛ランドフェア、アイランド2024、そして利島会が毎年開催しているバーベキューパーティにも参加しました。

もちろん島嶼郷友連合会の総会にも出席しました。八丈関係では、全国農業高校収穫祭、八校野球部、サッカー部の夏の大会の応援に行きました。

だが何といっても最大のイベントは、八丈島の郷友会の一つ「檉立文」の総会が八丈島で開催されたことです。例年、秋のバス旅行を行っていたのですが、会長以下役員が一新され、出身地区檉立で地元の皆さんと親交を深めたいと計画されたようです。我々八丈島郷友会からも9名（内3名は兼任）の方が参加下さ

いました。総会は、会長挨拶に続き、町長・議長・自治会長の皆様より祝辞を頂き、滞りなく無事終了し、続いて、大澤博紹副会長の乾杯で親睦会へと移りました。会場になった「いそざきえん」は島の食材にこだわり懐かしい料理を出してくれるお店です。

食事の後は八丈島郷友会菊池順会長より「今日は皆様楽しんで下さい」との挨拶があり、地区の皆さんの自己紹介もありました。



恒例の八丈太鼓。笹本良孝会長、富沢朗商店、伊勢崎唯さん、司会担当の大澤康兼さん達の素晴らしい八丈太鼓で無事、会も終了しました。

今年度も、八丈島そして島嶼各島との親睦をはかり、八丈島郷友会の総会も故里八丈島で開催出来たら良いなと、新年を迎えて思う次第です。



神津島は私の第二の故郷です。

神津島会 佐藤 一美

平成のはじめより仕事で、神津島に通うようになりしました。令和の時期に至っては四〇年間の長きにわたって、石材の仕事に携わってきました。

島に唯一の一軒のお寺「湊響寺」の仕事で縁があつての長きにわたりました。色々なことがありましたが、島の人は信心深くすごい思い入れがあり、考え方に入っていくのに何年もの日にちが必要でした。

当時は飛行機もなく、夜の一時に竹芝を出て翌朝の昼頃到着一四時間の時間が必要でした。然し今は飛行機で三〇〜四〇分です。

こんなことがありました、式根島で汽船が風波のため引き返す状態でした、島の漁船をチャーターしてやつとのこと到着したこともありまし

た。今では夢のような話です。毎回の訪問は決まって民宿泊まり、いつも親切に対応下さり今では仕事抜きで、お付き合い頂い

て居ります。さて仕事ですが、重量物石材は今では車が必要ですが、墓地自体が参道が三〇cmから四〇cmの幅で機械で運べず、手作業のみの非常にきつい仕事で通称「ばつたくり」といってその場所まで手作業で運びます。

その運び込みは現場まで一〇〇mから一五〇m位の距離で、一番嫌がられる作業です。重いもので三〇〇kgから四〇〇kgです。ずいぶん苦労しましたがこの施工にはいつも気合が入ります。作業が完成すると大変喜んでくれる人が多くやりがいになっておりました。四〇年もの長期にわたって通うと、第二の故郷の認識は当然となります。

一時、七島に地震の時期がありました。丁度その時に施工がありました。墓所内で地震にあいました。古い墓石が「バーン」と三〇cmほど跳ね

上がり「くるつと」一回転して元の場所に収まった景色を目の前で見たときは肝をつぶしました。生涯一度きりの経験でした。今は島の人たちの毎日のお墓参りといかに先祖を大事にする気持ちが本当に分かる気が致します。私にとってはこの歴史と経験が自分の性格の一助になっていることの請負でもあります。

今日も埼玉で都内で現場を忙しく過ごして居りますが、そろそろ島に行かなければと思つて居ります。近頃は漁業の方も良い話が聞かれないので心配一途ですが、今後ますますの発展を希望してやみません。繰り返しですが「第二の故郷」は我が宝です。



第十五回 ふるさとに思いを寄せて

利島会会長 梅田 勉

十月二十七日(日)開催となった昭和記念公園のバーベキュー大会は清々しい秋空のもと懐かしい恩師の先生方も馳せ参じて開催しました。

参加していただいたみなさん、お手伝いしていただいたみなさんありがとうございました。今年には少なめの参加者でしたが、利島会から二十一名、島嶼郷友連合会から九名、合計三十名の方々に集合していただきました。

磯ものバター醤油焼き、明日葉の胡麻和え、磯ものみそ汁、焼きそば、赤飯などたくさん懐かしい香りを味わっていただきました。公園の銀杏並木も色づき初め、秋の素敵な景色が迎えてくれました。水平線に神々しくそびえる利島の宮塚山は裾野が海へと雄大に広がります。海に囲まれ美しい島です。海に囲まれ海に隔てられてはいても、二十万本の椿が全島を覆う椿の島には優しく温かい人々の暮らしが息づいています。

春を迎えた島を歩けば椿の花が満開に咲いて心とませてくれます。晴れた日は伊豆諸島の島々を望むことができ、夜は満天の星が広がります。新東京百景の一つともなっています。これから「ふるさとに思いを寄せ」、島の人たちを思う心を持ち続けていきたいと思っています。はるか昔よりきびしい自然の中で先人が育んできた利島は魅力いっぱい島です。サクユリ焼酎はこのほか美味しく人気の一品です。一月中には地ビールも発売予定です。是非一度訪れてみてください。



今回も盛況だった

第2回親睦ゴルフ会 in 大島

大島会 河野 秀夫

新年を迎えて郷友会会員の皆様におかれましては心豊かな年になりますようお祈り致します。私は十六歳の時に本土に行きましたので、幼い頃の思い出に心を馳せます。山に木の実を取りに行ったり海では、泳いだり魚釣りをしたり、本土では体験できないような日々を過ごしたことは、年齢を重ねるほどに思い出の宝物です。新島の島自慢は、砂浜がきれいなことです。島の南部にある羽伏浦海岸は約六、五kmも続く白砂のロングビーチ、東京でありながらリゾート気分を味わえます。若郷

は、島の北側にあり、海底に根があるのでシュノーケリングがおすすめです。黒い砂浜です。防衛庁前には石と水をテーマにした新島親水公園があり良い所です。また、新島の特産品コーゴ石でできた古代ギリシャ建築風の湯の浜露店温泉が無料で楽しめます。島出身の方々は、船や飛行機でないと帰島できないからこそ島への想いは愛おしく思われると思います。郷友会という会で思いを分かち合えることを本当に幸せに感じて居ります。この先々も郷友会の活動が末永く続いていくことを願って居ります。

しみました。実は、この前夜祭のために秋廣会長が交渉して大島のフラガールに出演を依頼していたのです。彼女が出てきた途端、会場が華やかな雰囲気になりました。動きの乏しい動体表現力に魅了されました。動きの乏しい心がこもっており、楽しく呑み過ぎて予定時間を延長する程でした。

大島リゾートCCでは八時三十分から六組二十四名(島内十七名、島外七名)がスタートしました。冬の大島はやはり西風が強く吹き荒れており、伊豆半島を一望できる打ち下ろしのスタートホールでは、各組とも左右OBの恐怖感に負けず豪快なショットを繰り出していました。随所に島特有のアゲインストの風や硬いバンカーと距離感に洗礼を受けながらも、全組無事ホールアウトしました(ボールは沢山竹藪に打ち込みましたが一時期過ぎから始まった表彰式は、帰りの高速船を気にしながら豪華賞品をゲットできるかどうか皆さん期待していたと思います。今回の優勝者は大島在住の川島康雄氏(大島医療センター)で、イン・アウトとも四十二のグロス八十四でした。第一回の平川氏(七島信用組合)に続き、郷友連合会ゴルフ部は完敗でした。

今回の大島での親睦ゴルフ会は、前夜祭でもゴルフでも「足を使い、汗をかいて島の人達と交流する」という会の目的を十分達成しました。3回目も開催しますので、ゴルフが好きな方や始めたいと思っている方は是非参加してみませんか？お待ちしております。



「知られざる島の歴史旅」 火山島・青ヶ島全島避難の軌跡

NHK『英雄たちの選択』に出演して

「一本の電話から」

順天堂大学 土屋 久

青ヶ島村教育委員の荒井智史さんから電話が掛かってきたのは、本年（令和六）五月中旬のことでした。今度、NHKの『英雄たちの選択』という番組で、青ヶ島の「還住」の歴史を特集するから、先生（土屋のこと）が青ヶ島研究者の代表として番組に出演してくれないか、との依頼でした。私は、確かに、ここ二〇年ほど青ヶ島の民間信仰を中心に研究をおこなってきました。ですが、これまで長いこと島を研究されてこられた先達の方々がおられる中で、私ごときが代表として出演してよいのか、正直迷いました。しかし、荒井さんの熱意に背中を押されるような形で、最終的には出演を快諾いたしました。

青ヶ島は、その「孤島性」から、あるいは、驚嘆すべき自然の造形から、テレビ番組には度々取り上げられてきており、また、青ヶ島村では、ます。そうした番組を、実際にご覧なられた方も多いかと思えます。ところが今回は、還住を本格的に扱うことがこれまでの番組の内容と大きく異なるということです。還住については後ほど詳述しますが、青ヶ島で江戸時代の後期に起こった火山の大噴火により、八丈島に全島避難した島民が、半世紀の末に島に戻った出来事のことを指します。このことを青ヶ島の方々は、とても誇りにしているのですが、この歴史を正面から扱ったテレビ番組はこれまでなかった、と先の荒井さんや、現青ヶ島村教育長の田中さんは指摘されています。興味本位に流れる傾向のあるテレビ番組が多い中で、『英雄たちの選択』は、青ヶ島の歴史・文化を正面から扱おうとする、画期的な番組と思われるかもしれません。

昨年（令和五）に第一回の青ヶ島村文化保護審議会が開催され、サクユリが青ヶ島村指定文化財に指定されました。本年度（令和六）には、オオタニワタリと「旧名主・佐々木家文書」が新たに文化財の候補に上がり、八月には指定を受けました。後者は、還住の立役者の一人である佐々木次郎太夫の末裔佐々木家に伝わる「青ヶ島諸覚」「八丈島小島青ヶ島年代記」「青ヶ島大概帳」註の総称です。この中の一つである「青ヶ島諸覚」には、青ヶ島の噴火と還住の経緯が詳細に記されています。こうした動きもあり、NHKの番組は、とてもタイムリーであったことを付言しておきます。

池之沢（青ヶ島の地名）で塩分を含んだ湯が湧き上がり、水面がmから十一m上昇。名主七太夫、神主豊後が注進のため出島
天明三年（一七八三）
大地震、大爆発。池之沢で男十一人女三人焼死
天明五年（一七八五）
最大の爆発。昼でも暗い日が八間続く。島民は八丈島に全島避難し（天明の別れ」と称される）、ここから五〇年にわたる、帰島への苦難の歴史がはじまる。
寛政元年（一七八九）
名主三九郎ら十二人が青ヶ島を調べに赴く。
寛政四年（一七九二）
三九郎ら二〇人が青ヶ島に戻り、うち十二人が島に残る。三九郎らは八丈島に戻る。ノネズミの被害甚大。
寛政五年（一七九三）
青ヶ島の残した者の内、五名が八丈島に向かうも行へ不明。
寛政六年（一七九四）
食料の乗せた船が青ヶ島に向かうが、房州に流される。
寛政九年（一七九七）
三九郎ら一四人が青ヶ島に向かうも、紀州二木

島へ流され、三九郎を含めた十一人が亡くなる。
享和元年（一八〇一）
青ヶ島に残り八年間島の再興に苦闘した七人が八丈島に戻り、以後、一六年間、青ヶ島は無人数となる。
文化一四年（一八一七）
佐々木次郎太夫が名主となり、還住へ新たに動き出す。
文政七年（一八二四）
八丈島仮住居の青ヶ島の民たちが、残らず青ヶ島に戻る。
天保六年（一八三五）
青ヶ島の耕地が整い、検地がおこなわれる。還住の完成。
天明五年の大噴火からすぐに、青ヶ島還住の動きはあったものの、ノネズミの被害や、青ヶ島と八丈島の間を流れる激しい海流に阻まれ、名主の三九郎をはじめとした多くの犠牲者が出ました。年表には書ききれませんでした。が、青ヶ島に送った船は一〇回では数えきれません。そうした中、八丈島に避難していた青ヶ島出身者をまとめ、帰還への計画を立て、それをとうとう実現させたのが、名主佐々木次郎

大夫という人物でした。今回のNHKの番組では、この次郎太夫を「英雄」と位置付け、彼の事績を中心に、還住を描いていくという構成になっています。
「二〇一三年から始まった『英雄たちの選択』」
『英雄たちの選択』は、二〇一三年五月三〇日からNHK BSプレミアム（二〇二三年十二月よりNHK BS）で放送されている歴史教養番組です。
日本の歴史に名前を残した人物が、人生の選択を迫られた際に何故そちらを選んだのか、選択するまでの様々な葛藤を追いつながり、短編仕立てのドラマや、アニメーションを使って再現していきます。また、ゲストや司会者が、もし自分であればどちらを選択するかを各自、その理由とともに発表していく流れとなっています。
本年七月二十二日の回（再放送あり）では、青ヶ島の還住がテーマとなり、先の次郎太夫が「英雄」として取り上げられ、青ヶ島に還るか否かが、「人生の選択」となった

わけです。次郎太夫が名主として登場したのは、天明の別れから既に三〇年ほど経った文化一四年のことです（年表を参照）。三〇年という年月は、島の草木を噴火災害から回復させ、また、この頃には火山灰などの被害もある程度落ち着いて、帰還への環境が整いつつあった時期のように思われます。しかし同時に、避難先の八丈島で産まれた子どもも増えてきていて、故地への帰還を望まない人も出てきていたかもしれません。青ヶ島に還るとしたら、この時が多分ラストチャンスだったのではないでしようか。その様な中で、次郎太夫は、厳しく喧嘩を諫め、繰り返し仲良くすることを説きます。同時に、各々に細かに役割を与え、その役職に励むことを指示します。このように避難先の人たちの結束に苦心し、また、青ヶ島渡海に適した日和の時期を徹底的に研究します。そして、とうとう名主になってから約七年後の文政七年に、「仮住居」に居た人たちを率いて、

青ヶ島への帰還に成功するのです。民俗学者の柳田國男は、この偉業を讃えて、次郎太夫のことを「青ヶ島のモーゼ」と呼んでいます。偉業の背景には、もちろん三九郎をはじめとした先人たちの遺産があるわけですが、柳田の言は宜かな、と思われます。番組の収録は砧スタジオでおこなわれました。司会で歴史学者の磯田道史さん、NHKのアナウンサーの浅田春奈さん、防災研究者の山村武彦さん、そしてタレントの篠原ともえさんが当日のメンバーです。ちなみに篠原さんは、青ヶ島にルーツをもつ方です。私は、島で神事の調査をおこなう際、彼女のお祖母様は大変お世話になりました。番組終了後には、篠原さんから青ヶ島の「ひんぎゃの塩」を出演者各々が貰いました。また、お祖母様が造られた「あおちゅう」の古酒を、皆さんでいただいたのはよき思い出です。

番組中、それぞれが「人生の選択」にどのような答えを出したのか、それはNHKのオンデマンドを見ていただければと思います（数百円かかってしましますが…）。最後に、蛇足ではありますが、番組のプロデューサーがとてもよく還住の歴史を勉強されていたのには驚きました。

今年、「青ヶ島諸覚」とともに青ヶ島村指定文化財となった史料に「八丈島小島青ヶ島年代記」があります。ここには、八丈島、八丈小島、青ヶ島の三島で起こった数々の災害が記載されます。火山の噴火だけでなく、飢饉や船の難破などの危機的な状況が淡々と語りられています。それを読んでみると、島という資源が限られた地域で、そこにあるものごとをことごとく利用して、乗り越えてこられた先人の姿が浮かび上がってきます。もし、災害対応に失敗していたら、島は壊滅しているわけですから、これまで、一度たりとも、危機を乗り越えることに失敗したことがないという事になります。

ところで、若干話は変わりますが、近年、災害と絡めて、レジリエンスという概念が使われることが多くなってきたようです。以下、この概念の説明を『レジリエンスの諸相』から引いてみたいと思います。

大災害を受けても押しつぶされることなく「しなやかに」復興することができる力として、「災害レジリエンス」という概念が生まれている。これは突発的な災害に対する、防災・減災の考え方のひとつである。そもそもハード対策による強固な備えには限界があり、様々な知恵を総動員して被害を軽減させたいという願いがこの言葉に込められている。

この「力」は、まさに様々な災害を乗り越えてきた、先の三島にみられる力でしょうし、また、伊豆諸島の島々共通にみられる力だとも思えます。青ヶ島の還住は、この力の現れの象徴と言えるのではないでしようか。

「離島は日本の雛形」と言われますが、近年の災害が多発する日本の状況に鑑みて、還住は、一離島の出来事としてだけ捉えるのではなく、日本全体で共有すべき事績であると考えます。

【参考文献】
『青ヶ島の生活と文化』
青ヶ島村教育委員会
『青ヶ島還住記』柳田國男
『レジリエンスの諸相——人類史的視点からの挑戦——』放送大学
『わたしたちの青ヶ島（改訂版）』青ヶ島村立青ヶ島小・中学校社会科副読本改訂委員会編集
【註】
「青ヶ島諸覚」
この「青ヶ島諸覚」には、宝暦九（一七五九）年二月から天保十一（一八四〇）年三月までの記録が収められている。その内容は、青ヶ島から八丈島役所へ差し出した諸届、願書その他の控である。この史料は、八丈島役所に保管されていた「控」を写したものであり、青ヶ島の還住の歴史が記された青ヶ島唯一の史料である。
「八丈島小島青ヶ島年代記」
「八丈島小島青ヶ島年代記」は数種確認されており、本史料は旧名主・佐々木家に伝わる写本であるため「青ヶ島本」と通称されている。内容は

一五世紀半ばから、一九世紀半ばまでの約四〇〇年にわたる八丈島、八丈小島、青ヶ島の断片的歴史が書かれたものである。内容の過半は、天災による地震・津波・風水害・噴火・漂流・飢饉などの記事で、あとの約半分は、人災による疫病、流人・貢税などの他にそのつどそれらの天災・人災に対処してきた島人達の功罪を粉飾を加えずに記載している。「青ヶ島本」は他のものに比べて記述が正確で、記載量も多いため、八丈島、八丈小島、青ヶ島3島の歴史の概要を知るには、まとまった文献といわれる。

「青ヶ島大概帳」
表紙に「青ヶ島大概帳」と記された「反別帳」（土地の所有者、所在地、面積、年貢の額等の台帳）である。これにより、記録された時点での青ヶ島の生産力の規模を推定することができる。本史料の作成年は記されていないが、記述されている内容から、「天明の別れ」（天明五（一七八五）年）以前の土地の記録と考えられる。

郷友会の皆さんとの

歌舞伎鑑賞

伊豆大島 清水 勝子

郷友会の皆様には、平成二十五年の伊豆大島台風二十六号土砂災害の際、率先してご支援くださり私たちが励まされましました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。災害から十一年経ちましたが、秋廣会長をはじめ郷友会の皆様にはいつもお気に掛けて背中を押してくださり、私共の前を向く活力になっております。現在も私は語り部として災害に向き合っています。

そのような中、東京島嶼郷友連合会の「錦秋十月大歌舞伎観劇会」と「竹本葵太夫を囲む懇親会」に参加させていただきました。秋廣会長には機会があれば参加させていたいただきたいと願ひしておりました。柳瀬信吾ちゃん（竹本葵太夫）とは親戚としてお付き合いしておりますが、これまで観覧の機会がなく、今回

が流罪にされた薩摩国鬼界ヶ島が舞台ですが、同じように「流人の島」に住む私たちにとつて興味を引く物語です。

早めに歌舞伎座に向かい、イヤホンガイド・オペラグラスを借り、筋書を購入。そのおかげか初めての歌舞伎鑑賞でも愉しむことができました。私が注目したのは、島の海女（千鳥）の衣装。黒縹子の衿、白抜き五つ紋の小袖着物です。昔、大島の女性たちが着ていた衣装に似ていて興味深く鑑賞しました。舞台装置、衣装、時代背景、役柄、観客とどれをとっても歌舞伎の奥の深さを感じ満喫しました。その中で葵太夫の活躍ぶりは凄いと感動しました。

柳瀬信吾ちゃん（竹本葵太夫）とは親戚としてお付き合いしておりますが、これまで観覧の機会がなく、今回

初めて歌舞伎座で葵太夫を拝見しました。いつもの信吾ちゃんとは違う迫力と情緒たつぷりの義太夫節にすっかり興奮魅了されました。若い人たちの育成にも頑張っている姿は素晴らしい、島の人たちと応援していきたいと思いました。

帰島して信吾ちゃんのお母様（柳瀬キミ子さん）にご報告に伺ったら、既に信吾ちゃんから電話があったとのことでした。お母様も郷友会の皆さんが大勢で観覧してくれたと喜ばれていて、感謝の言葉を申していました。

懇親会もとても和やかで楽しく過ごさせていだき、お世話してくださった方々本当にありがとうございました。大島高校の先輩方や同郷ゆかりの方々と一緒に過ごしていただき、心と時間と活力をいただきました。心より感謝申し上げます。このような機会が広がってほしいと思います。

末筆ではありますが、葵太夫さんのご飛躍と貴会の益々のご発展とご活躍をお祈り申し上げます。

なつかしい故郷に帰る

八丈島郷友会 菊池 恭子

榎立会の現地集合八丈

旅行は参加出来なかった

足腰が不自由。

旅行は参加出来なかったけれど、娘夫婦が介助同伴して私の卒寿九十歳誕生日祝いを兼ね、十一月十一日から三泊四日の八丈旅行を企画してくれました。暖かくブーゲンビリア、ハイビスカス、ストレチアが咲き乱れ、雨風もなく絶好の観光日和でした。『綿帽子さわらば落ちん禿頭さぞ寒からめ西の山風』と噴火したばかりの八丈に流人として着いて心境を歌った宇喜田秀家公。如何ばかりだったでしょう。

真！従妹と同級生がいた、早速パチリ。えこ、あぐりーとで江戸辛子とグワバを買い込む。名古の展望台で末吉港を見渡す。中々郷足場きらめきでやつと温泉へ、しばし休まる。「いそぎ園」に戻つてご赦免料理を頂く。豪華なお刺身、麦雑炊、きん干し等素朴な料理を忍び意外に美味しいと思つた事でした。大里の玉石垣を見て八丈富士の周りを一周、小島がすぐそばに見え意外と大きいと思ひました。再び南原千景敷へ夕陽を見に行き、最終便が宇喜多秀家と豪姫の真上を通過したので驚いた。

四百年前の歴史を語る八丈富士。さて空港よりレンタカーで空腹を満たす為、三根「魚八亭」へ青ぜ尾長ぶりと島魚ばかりのお刺身定食は島唐辛子が美味しかった事。

十四日登龍峠の園地で孫のどんぐり拾い。民芸やましたで小物を買ひ空港「アカコッコ」で明日葉そばを食べ、時間があつたので八丈書房へ、イケメン宇喜多秀家公の本を一冊買って貰ひ、いよいよ東京羽田で待つ息子の元へ。往復高齢者先乗りで快適な旅でした。

一休みしてこれから目的の父母姉弟達のお焼香巡りに出発。苦勞の連続でもっと長生きして欲しかった。

ふれあい牧場から民芸あきで土産買ひ物後、夕陽を見るため南原千景敷海岸へ、雲が邪魔してよく見えず、周りには明るかった十三日目

久しぶりに会う義妹達は変わらぬ笑顔で接してくれ島料理でもてなしてくれる。皆、高齢者になつ

黄八丈めゆ工房へ行く。黄八丈スカーフ娘にプレゼント。発見！銀座を歩く黄八丈祭りの写



魂で詩を書いた

宮川哲夫の魅力

島嶼郷友連合会
梅田 勉

大島波浮港村が生んだ偉大な作詞家



根の家々が雑木林に埋もれるように散在していた。宮川家が間借りしたのは板塀を張り巡らせた門構えの大きな屋敷の離れ。哲夫は一年半ほど地元忠生村の小学校で教えたのち、世田谷小学校に転勤、小田急線で通勤している。

宮川哲夫は一九二二年（大正十一年）大島波浮港村網元の長男として生まれ、東京府豊島師範学校を卒業後大島差木地国民学校教諭として赴任しました。その後昭和二十五年作詞家を志して上京、夫人と幼い子供たち三人とともに現在の町田市に転居、忠生小学校で教鞭をとりながら作詞家修行をした。町田市は市町村合併がすすみ、いまでは人口四十三万人を超える都市ですが、宮川哲夫が家族とともに移り住んだ地域は、当時はまだ南多摩郡忠生村と呼ばれていました。住民のほとんどは農家で藁ぶき屋

泣いたら燕が笑うだろ
ロイド眼鏡に燕尾服

涙出た時や空を見る

サンドイッチマン

サンドイッチマン

俺らは街のお道化者

とぼけ笑顔で今日も行く

ピエロのとぼけ顔に哲

夫は哀しみをみていた。

いったんどん底をみた人間が体を張って生きて行く

こうとする姿が浮かび上がる。それが人々の視線

に触れた。宮川哲夫三十一

歳。この曲のヒットに

より、昭和二十九年哲夫

は十二年間の教師生活に

別れを告げ世田谷小学校

を退職してビクターの専

属作詞家となった。

続いて昭和三十年、「ガ

ード下の靴磨き」が宮城ま

り子の唄で大ヒット。

紅い夕陽が

ガードを染めて

ビルに向こうに沈んだら

街にネオンの花が咲く

俺ら貧しい靴みがき

ああ夜になっても

帰れない

昭和三十年は電気冷蔵庫、

テレビジョン、電気洗濯機が三種の神器と

なつて新しい時代の幕を開けた。渋谷駅や有楽町

駅の「ガード下は大勢の人

たちが待ち合わせに使

う場所でもあり、そこ

は必ずといって良いほど

靴磨きの姿があった。急

激に変貌してゆく社会

の哀感や人々の心情を

とらえる宮川哲夫の世

界がありました。繁栄に

向かって走り始めた社

会から抜け落ちた世界

が「街のサンドイッチ

マン」と「ガード下の靴

みがき」だったのです。

戦後日本の消費水準

がほぼ戦前のレベルま

で復活するのが昭和二

十九年、そのあたりから

日本は成長期にむけて

助走に入り、高度成長へ

と離陸して行く。それは

日本人の伝統的な生活

様式が根底から変わっ

ていった時代でした。

昭和三十三年に発売

された、フランク永井の

「夜霧の第二国道」はマ

イカー時代を先取りし

ている。

つらい恋ならネオンの

海へ 捨てて来たのに

忘れてきたに バック

ミラーにあの娘の顔が

浮かぶ夜霧のあゝ第二

国道

昭和三十三年、三十

四年にはフランク永井

「東京ドドンパ娘」、佐川

ミツオの「背広姿の渡り

鳥」、昭和三十八年には

三田明の「美しい十代」

などが次々に大ヒット。

白い野ばらを捧げる僕に

君の瞳があかるく笑う

いつもこころに二人の胸

に 夢を飾ろうきれいな

夢を 美しい十代あゝ十

代抱いて生きよう幸福の花

昭和四十一年橋幸夫の

「霧氷」ではレコード大

賞を受賞した。

霧氷：霧氷：

想い出はかえらない 遙

かな遙かな冬空に消えた

恋 霧の街角で告げたさ

よならが 僕を僕を僕を

泣かす

戦前から戦後へと大き

く価値観が変容するこの

時代にあつて揺れ動く宮

川哲夫の心を支えていた

のは詩作への情熱でし

た。都市の片隅で生きる

人々の悲哀や貧しさを

歌った彼の詩作は次々と

ヒットしたが魂で詩を書

いたと言われています。

そこにはヒットメーカ

としての重圧と苦悩もあ

りました。

す昭和歌謡の中で宮川哲

夫が遺した数々の作品は

昭和四十九年に五十二歳

の若さで死去するまで八

百五十作がレコード化さ

れています。大島波浮港

が生んだ偉大な作詞家は

今も色あせることなく輝

き続けていることに感銘

を受けました。三女の浅

見洋子様、並びに町田市

民文学館の許可を得て連

合会、だよりに掲載しまし

た。

〈参考にした著作等〉

・公園の手品師（遺構）

・街のサンドイッチマン

（辻由美著・筑摩書房）

平成十七年発売

平成十五年五月二十四

日朝日新聞記事

・平成二十七年四月十八

日、六月二十八日町田市

民文学館開催昭和の街角

を歌で綴る宮川哲夫展

リーフレット等を随時引

用した。

・資料提供

町田市民文学館

房 文子（波浮港出身）



伊豆七島 建設業協同組合

事務局

〒105-0012 東京都港区芝大門 2-4-4 富士ビル 7 階
TEL:03-3436-3636 FAX:03-3436-4730

有限会社 黄八丈めゆ工房

代表取締役 山下 誉

〒100-1623 東京都八丈島八丈町中之郷 2542

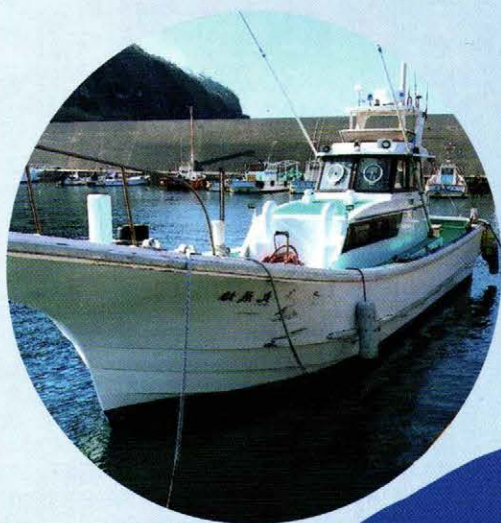
TEL.04996-7-0411 FAX.04996-7-0414

E-mail meyukobo@silk.plala.or.jp



釣り客のリピーターが多い宿
遊漁船(雄成丸)を所有

民宿 寺田屋



代表 寺田 優



〒100-0301

東京都利島村119-2番地
TEL:04992-9-0251





一般土木業・八丈町指定浄化槽清掃管理業
NX-GAS 特約店・八丈町指定水道工事店

M(株)佐々木住設

八丈町中之郷 1723

代表取締役 佐々木 剛

TEL (04996) 7-0525 (代)
TEL (04996) 7-0218

離島特別入試
開設!

その好きを、かなえます。

杉野服飾大学
SUGINO FASHION COLLEGE



www.sugino-fc.ac.jp

服飾学科 (モードクリエーション / インダストリアルパターン / テキスタイルデザイン / ファッション
プロダクトデザイン / ファッションビジネスマネジメント / ファッションビジネス英語 / パーソナル
服飾表現学科 (衣装表現 / スタイリング / VMD / メディア表現)
服飾文化学科 (歴史 × レプリカ製作・修復 × 衣のもののづくり × サステナビリティ)



いい服には、法則がある。

ドレスメーカー学院 学校法人 杉野学園
Doreme Sugino Gakuen Since 1928

www.dressmaker-gakuin.ac.jp

服飾造形科 / アパレル技術科 / 高度アパレル専門科 /
アパレルデザイン科 [進学課程]



目黒駅
ドレメ通り
徒歩3分



学校法人 杉野学園 | 〒141-8652 東京都品川区上大崎4-6-19 | TEL: 03-3491-8152 | MAIL: kouhou@sugino.ac.jp | JR山手線・都営三田線・東京メトロ南北線・東急目黒線「目黒駅」ドレメ通り 徒歩3分

東京諸島で唯一のローカル紙

毎月8日・18日・28日発行

東京七島新聞

東京都島嶼町村会・東京都島嶼町村議会議長会指定広報紙

発行所 東京七島新聞社

〒105-0022

東京都港区海岸 1-4-15 島嶼会館 2F

TEL 03-6459-0292 FAX 03-6459-0094

E-mail sinp@gol.com

郵便振替口座 00160-9-99828

(購読料 1 ヶ月 900 円)

東京諸島向け広告&PR

Facebook 開設!



<https://www.facebook.com/tokyo7i>

広告とPRは東京七島新聞を
ご利用ください。

購読と広告の申し込み先

本 社	TEL 03 (6459) 0292
大 島 支 局	TEL 04992 (2) 3540
	(4) 0064
新島通信部	TEL 04992 (5) 1323
式根島通信部	TEL 04992 (7) 0260
神津島通信員	TEL 04992 (8) 1047
三宅島支局	TEL 04994 (2) 0051
八丈島通信局	TEL 04996 (7) 0014
	(9) 5860



明けまして
おめでとうございます。



大自然の東京諸島へ

職員を募集しています!

「島らしさ」をキーワードに職員が島らしい働き方を考え実践しています。

- ①ビジネスカジュアルの導入 ②一生のお願い制度 ③島めぐりサポート
④バースデー休暇 ⑤子供の感染症にかかる特別休暇制度 ⑥防災リュック配布
詳しくはホームページの採用情報を参照または直接お問い合わせください。



七島信用組合

〈本部総務部〉TEL.04992-2-1661

Mail:jinji@shichishin.com

http://www.shichitou.shinkumi.co.jp/

店 名	住 所	電話番号
本 店	大島町元町 4-1-3	04992-2-0777
東京支店	港区竹芝客船ターミナル内 海岸 1-12-2	03-5843-3363
新島支店	新島村字川原 38-1	04992-5-0661

神津島支店	神津島村 1448-5	04992-8-0111
三宅島支店	三宅村神着 239-1	04994-2-0081
八丈島支店	八丈町三根 1929	04996-2-1201
小笠原支店	小笠原村父島字東町	04998-2-7410

編集後記

山口 勝子

昭和一〇〇年 郷友
会六〇年 令和七年は
限りの良い数字で新年
を迎えました。

皆様の島への想いを
載せて新年号の発行に
至りましたので、お届
けします。

只、ひたすらに執筆
者お任せで進めて参り
ましたが、半分の方は
売れっ子作家の気分を
味わう如く、締め切り
に間に合わず：でした
が、ともあれ良い紙面
が出来たのではないで
しょうか。

五月十一日の六〇周
年総会、懇親会に向け
て、周囲の方々を勧誘
して心に残る記念すべ
き会としたい。

その為に「だより」
がお役に立つことを
願ってやみません。

編集委員

河野秀夫(大島)
白井勝美(大島)
菊池 順(八丈島)
駒木正雄(八丈島)
梅田 勉(利島)
清水邦洋(神津島)
山口勝子(大島)